

東京女子師範学校附属幼稚園の保育音楽について

—先行研究の検証及び音楽美学的立場からの考察—

秋 山 治 子

序

日本に初めて西洋音楽が入ってきたのは室町時代末期の天文21（1552）年、周防の山口で行われた歌ミサが最初の記録であるが、⁽¹⁾ 明治初年の軍楽の輸入による西洋音楽の衝激は、以後の日本の音楽事情を大きく変える基となった。⁽²⁾ 国防のために必要となった軍楽の本格的な伝習は「明治二年に島津藩が軍楽伝習生三十名を横浜に派遣し」⁽³⁾ たのが始まりである。

本稿は「学制発布—唱歌授業の設置—西洋音楽導入」という新しい教育潮流の中で、明治9年に設立された「東京女子師範学校附属幼稚園」の保育音楽がどの様に行われていたかを研究したものである。

研究の目的は、筆者が、学生ひいては幼児に教えている歌唱教材の源泉が如何なるものかを知り、保育、教育に於ける筆者自身の音楽観を反省、構築するためである。本稿はその研究の第一歩であり、焦点を明治期に絞り第Ⅰ章で幼児教育界最初の音楽教材に当たる「保育唱歌」作成の頃を概観し、第Ⅱ章で当時の未刊の和綴資料を解読して、その中から「保育音楽」に関する内容を拾い出して解釈と考察を加えた。尚、紙面の都合で、第Ⅱ章は回を改めて発表することになった。

第Ⅰ章 〈東京女子師範学校附属幼稚園における初期の保育音楽〉

江戸末期、新しい市場の開拓を求めてやってきた欧米諸国の強い力は、封建制と文化爛熟の世に安住していた人々を目ざめさせた。文化的、社会的に国際社会の一員となるために又、先進国の政策の渦に巻き込まれることを回避するためにも、我国は明治維新を成し遂げ、明治5年には学制を敷き、国民の力の強化を図った。それにより国民は全員小学校に入学しなければならなくなったわけであるが、明治5年と明治9年（東京女子師範学校〔現お茶の水女子大学〕に附属幼稚園が開設された年）の間の時間的な速さに目を向けると、幼児教育の世界にも政府のまなざしが強く向けられていたといえよう。しかし幼稚園が法制上、独自の存在として認められたのは大正5年（幼稚園創設後50年目）の「幼稚園令」においてであり、長期に亘る試行錯誤が幼児音楽の上においてはどの様な形で現れていたのかを探究することは興味深い。

本章では文献を基にして、東京女子師範学校附属幼稚園（以下「附属幼稚園」と呼ぶ）の開設時期を中心に、保育音楽の様相をたどることとする。

I-1 <「附属幼稚園」設立の頃の音楽状況について>

「学制」において幼稚園は小学校の一種とみなされている。即ち「学制第二十一章」「学制第二十二章」に「幼稚小学」という記述が見出せるが、⁽⁴⁾ この「幼稚小学」は「幼稚園に相当する物であるか、あるいは小学という字面からみて小学校の低学年と幼稚園とを組み合わせたものの意味であるかはっきりしないが(略)事実上幼児教育に関するものであるのは疑いない」⁽⁵⁾ と言われているが、「幼稚小学」が実現した例を諸文献から探すことはできない。日本の幼児教育は周知の通り唯一の国立幼稚園⁽⁶⁾である「附属幼稚園」で開始された。本幼稚園は明治7(1874)年創立の東京女子師範学校(1890年、女子高等師範学校、1908年東京女子高等師範学校と改称、1949年現制のお茶の水女子大学となる)の附属幼稚園として明治9年11月14日に開設(開園は同16日)された。明治10年7月に定められた「附属幼稚園規制」⁽⁷⁾には、三科目(物品科、美麗科、知識科)と三科を包有する25子目が設けられている。音楽関係では「唱歌」と唱歌を伴う「遊戯」—これらについては後述する—が25子目の中に並べられている。

ところで附属幼稚園の創設に際して、保育を担当したのは主任保母の松野クララ、⁽⁸⁾ 保母の豊田英雄、⁽⁹⁾ 近藤濱⁽¹⁰⁾であり、松野は早くも明治14年にはピアノ教授のために学習院女子部(現、学習院大学の母体で明治10(1877)年東京に設立された。明治17年宮内省直轄)へ移り、豊田は明治12年に出張の形で鹿児島県に赴き、鹿児島幼稚園創設に寄与し、近藤は明治12年中に芝公園内に私立幼稚園を開設したという経緯を辿るが、3人の教え子が保母養成の確立していない時期に、全国の幼稚園にその教えを広めていったという意味でも、明治期の幼稚園教育及び保育音楽への3名の貢献度は非常に高いものといえる。

本題に入る前にまず西洋文化と共に西洋音楽が取り入れられた当時の日本の音楽状況をまとめてみたい。既出の吉川英史、遠藤宏等の文献によると、江戸の音楽家は芝居其他の演芸場の催物に出演する他、武士、町人に教える事で生計を立てていた。殊に文化文政頃から、常磐津、長唄、端唄、舞踊その他の稽古所が多く開かれた。一方、京阪地方では主として、義太夫、地唄、箏曲、三味線音楽が行なわれていた。明治期に入り「帝国の領土内に外国の軍隊が駐屯している。しかもそれは少数ながら良く装備せられ、外観も堂々たるものがある(略)諸外国が日本人を威嚇するために置いた駐屯部隊を、日本人は逆に利用するだけの才覚を持っていた(略)吹奏楽と信號喇叭とは横浜の外国部隊を手近な師匠にして始めたこと」⁽¹¹⁾であった。明治初期の音楽は軍楽の他に讃美歌、⁽¹²⁾ 能楽、箏曲、琵琶楽、俗曲、子ども達のあそび唄、即ちわらべ唄、そして皇室を中心とした雅楽であった。明治の音楽教育の中に、子どもに人気のわらべ唄をそのままの形で取り入れることはできなかったようで^(13及び資料1の②参照)、正式に文部省により後述するような唱歌教材が作られるまでは、教師達は教材に困り、例外的な学校を除き、「どうしたかといえ、替え唄でいく以外なかった」⁽¹⁴⁾という時代背景のもとに「緊要な」⁽¹⁵⁾ 保育の一科として、新たな教材作りから始めようとしたことを考え合わせると、前述の3名、特に豊田、近藤両保母の音楽面での苦労が見えてくる。この未知の分野を彼らはどのように切り拓いていったのであろうか。以下に述べる。

筆者が国立国会図書館で直接所見した当時の代表的な幼稚園書の一つである訳書『幼稚園』

(桑田親五訳、文部省発行)の出版は、三冊中の上巻が明治9年1月で、中と下巻が明治10年と11年である。他方、東京女子師範学校発行の『幼稚園記』(関信三訳)の出版年は一、二、三巻共明治9年7月、附録が明治10年である。東京女子師範学校内における幼稚園開設の伺いが明治8年9月に太政大臣から許され、開園の運びとなったのが明治9年11月16日である。前記2種の訳書発行の日付と照合すると、開園前に殆んどが出版されていることがわかる。尚、研究者達から上記2種の訳書の原典の一つとみなされているデュアイの『キンダー・ガルテン』が日本に輸入されているが、文部省から当時の教育博物館に交付された日付けは明治10年3月であり、英語原書の表紙に、その日付け印が大きく押されているのを国会図書館で確かめることができる。

さて、東京女子師範学校の教員であった豊田英雄は、開園前の明治9年10月2日に附属幼稚園の保母兼務を申し付けられているが⁹⁸、我が国の保母第一号として、豊田は恐らくこれらの訳書に目を通したであろうと予想できる。これらの書籍を参考にしながら2人の保母が中心となって実施した保育音楽が、小学校に置かれたと同様のいわゆる「唱歌」であり、唱歌を伴う「遊戯」——「遊戯」には唱歌を伴う「戸内遊戯」と戸外(園庭)で自由に遊ぶ「遊戯」があったことがわかる——であった。そして開園まもなく実際の保育の中で歌われた歌が、次項で述べる「保育唱歌」と呼ばれるもので、後年文部省から刊行される『小学唱歌集』⁹⁹『幼稚園唱歌集』¹⁰⁰その他明治中期以降盛んに民間から出版された唱歌集にとって代わられる迄の間、幼稚園において歌われた歌である。尚、「保育唱歌集」としては正式に刊行されてはいないが、藤田氏は、明治19年9月、鴻盟社から刊行された『幼稚園唱歌』が『山家』以外の全保育唱歌を掲載していることを発見し、「保育唱歌」は事実上は出版されていた、ということを明らかにしている。¹⁰¹

本項をしめくくるに当たり「唱歌」と「唱歌教育」に関する基礎知識のために[資料1]を提示したい。本資料は明治12年に文部省内に創置された「音楽取調掛」(後の「東京音楽学校」現、東京芸術大学音楽学部)の掛長、伊澤修二が、明治17(1884)年に編纂、明治24年に出版した『音楽取調成績申報書』を山住正己氏が昭和46年に平凡社より『洋楽事始』として校注出版したものからの抜粋である。年代としては「附属幼稚園」開設後の事になるが、日本の音楽教育即ち「唱歌教育」の出発点としての重要資料として参照したい。

I-2 〈「唱歌」「遊戯」と外国の幼稚園書との関係〉

まず始めに当時の「唱歌」と唱歌を伴う「遊戯」という日本語が、前述した外国書等においてはどのようなことばで表されているかについて調べてみた。本稿では、当時の数ある和書と洋書の中から、代表書籍である日本語訳の『幼稚園』とその原典2冊に限って論を進めるが、詳しい研究は次回に回したい。

『幼稚園』は複数の外国書が基になって著わされたものであることが従来の研究⁽²⁰⁾から明らかとなっているが、一冊目として挙げられるのは、アドルフ・ドゥアイの『キンダー・ガルテン』⁽²¹⁾である。この他にもう一つの外国書が考えられている。それは、ロンジェの『プラクティカル・ガイド』⁽²²⁾である。筆者はこの2冊を国会図書館で所見したが、“ロンジェ”の方は第10版だが劣化が激しく進み、読みとれない文字もあり勿論複写も大学間貸出も禁じ

られている。

“ロンジェ”を概略すると、主として図説付きフレーベルの恩物 (Gift=die Gabe) の説明で、後半に33曲 (実際には29曲) の幼児歌唱曲が収録されている。即ち第 I ~ 第 XXXIII 曲まで (第 7, 13, 16 曲目は無い) の五線譜と英語の歌詞が載っている。歌詞のみの曲を含めて、全29曲中5曲は現在でも馴染みのあるピアノ曲の一部であったり、幼児曲の旋律であり、それら馴染みのある旋律が一曲全部を占めていたり、一曲のある部分だけに出てきたりという具合に構成されているのがわかる。その5曲の中の1曲は、現在の『むすんでひらいて』の旋律である。(この曲は『小学唱歌集』初編の第13曲目に『見わたせば』の題で載っている曲で有名である)。参考のために、“ロンジェ”の楽譜と『見わたせば』の楽譜を原譜に忠実に掲載するが (楽譜①②)、両者共譜面から読みとる限りでは、かなりゆったりとした楽想で、音価が倍に伸びているへ長調 (“ロンジェ”) とハ長調 (『唱歌集』) の曲である。

この曲 (原書中の題名は “The Pleasant Sight”) と、この一曲前に配置されている曲 “The Happy Home” の2曲をもって、原書 “ロンジェ” では “Introductory Songs” と題してひとくくりにして載せているが、訳書の方の『幼稚園』 (全て縦書である) では、曲の配置の仕方や文章の配置が少々原書と異なっている反面、全体的に見ると、省略や配置転換等をしながらもかなり忠実に原書に添っているのである。参考のために “ロンジェ” の紙面構成の骨組と『幼稚園』巻下、の関係箇所を対比的に見てみたいと思う。

★ < “ロンジェ” の内容構成 > (□ の枠及び、各項の頭部に付した①～⑤の文字は、整理記号として筆者が付したものである)

① “Gymnastic Movements” (“ ” 印は筆者)

Plate LXVII (図説67) として、19種類の身体の動き方が前向きや横向きの人体画で表わされ、それぞれに数字が付されている。『幼稚園』でもそっくり同じ様な図説が載っているのであるが、配置場所が内容的に異なる所に移動されている。“Plate LXVII” という表示からもわかる通り、ここ (原書の42頁目に当たる) に至るまでに66種の図説が登場しているのである。

② “Musical Gymnastic Exercises” (歌を伴う体操、筆者訳)

These exercises are of the greatest importance ; because children require, not only meat and drink, but fresh air, light, the influence of the sunshine, and well graduated exercises. “A sound mind”, said Cicero, “can only exist in a sound body. ”

以下1頁の英文が続くが、『幼稚園』においては「音楽の体操の事」と訳している。続く日本語訳は意味はよく伝えられていると思うが、漢字と片仮名を混えた文語体であるため、我々の感覚では解釈しにくさが残る。特に最後の節は、日本文だとある義務感が感じられる

が、英文を読むと、そこには将来の発展を見越した自由な発想を受け入れる精神が感じられるがどうであろうか（次にその英文と和文を紹介する）。

These exercises or games are adapted to very young children : They have been invented by children, and collected and set to music appropriate words by practical educators.

此體操ハ稚兒に適する者にして稚兒の自發明する所なり而して實地の教育に従事する者ハ此發明せる體操を集めて適宜の歌を作り音楽に合すべし

訳文における「体操」は“exercises or games”で、「適宜の歌」は旋律ではなく「歌詞」のことである。又「音楽に合すべし」の「音楽」は書物全体の内容から判断すると「唱歌」に当たる「歌」であることがわかり、現代人には当時の文意を完全に理解するのがやや難しいが、当時の人々にとってはどうだったのであろうか。

㉔ “Introductory Songs. ” (44頁目に当る)

These and similar songs are sung at the commencement of the exercises, and during some of the games with the Third and Fourth Gifts.

これらの歌は練習の開始時に歌われ、又第三第四恩物を伴う遊びの時に歌われる（筆者訳）（“ロンジェ”に於ける日本語訳は、後に紹介する〈『幼稚園』の内容構成〉の部分に載せたので参照してほしい）

㉕ I. The Happy Home.

五線楽譜と歌詞が書かれているが省略する。

㉖ II. The Pleasant Sight.

楽譜 1. で紹介した五線楽譜と 2 ～ 5 番の歌詞が続いている。

次の 1 ページ全部（46頁目に当る）には、先生 1 名と数人の子どもが輪になって遊んでいる絵が描かれている。

㉗ “Imitation of natural and artificial Movements. ”

自然の中にある動きと、人が作った動き（筆者訳）

㉘ III. The Pigeon-House.

五線楽譜とかなり詳しい遊び方や指導法についての文が続く、IV 曲目以降は同様の構成で続けられる。

★〈『幼稚園』の内容構成〉(横書きに直す)

㊸ 「音楽の体操の事」(「」印は筆者)

これは前掲“ロンジェ”の㊸の部分に当る。〈“ロンジェ”の内容構成〉で述べた通り、英文の訳が続くが、“ロンジェ”の㊸の“Gymnastic Movements”に載っている19種の身体動作の絵が、ここに移動して掲載されている。そして㊸の項は『幼稚園』では省略されている。

㊹ 「手引草の歌」

此歌ハ体操の初に謠ひ或ハ第三第四に授る玩器と共に之を謠ふべし

これは“ロンジェ”の㊹部分に当たるが忠実に訳されている。

㊺ 「第一 鴿舎ノ歌」

英文が日本人にわかるように詳しく訳されている。ただし、曲の配置は“ロンジェ”と照合すると明らかにズレていることがわかる。この曲は“ロンジェ”の㊺で、次の曲㊻は“ロンジェ”の配置のままである。

㊻ 「第二 睦マシキ家ノ歌」

くり返し述べるが、この曲は原書の“ロンジェ”では“Introductory Songs”の第1曲目である。

㊼ 「第三 楽キ景色ノ歌」

『幼稚園』では“ロンジェ”の項目㊼の部分“Imitation of natural~”が省略されて、曲とその説明が訳出されてゆくだけの構成をとっている。「手引草の歌」の2曲目に置かれる筈のこの曲(楽キ景色ノ歌)が「鴿舎ノ歌」と入れ替わって置かれている。

『幼稚園』のこのような構成のしかたからは、“ロンジェ”の意図する内容を伝えることは困難である。筆者の理解では、第Ⅲ曲目つまり“Imitation of natural~”の項の第1曲目以降の曲は、この項目が示す通り、様々な動きを歌いながら、遊びながら学んでゆくために並べられたものであり、この遊びや動き方のことを“Exercise”とか“Musical Gymnastic Exercises”という語で表現しているのだと考える。この考え方からすると、これらの“Exercises”に入る前に歌う“Introductory Songs”は、子どもの心を明るく和ませながら、これから行われる遊びや動きの活動へ導いてゆくための歌であり、その歌は次の2曲、即ち“I. The Happy Home”と“II. The Pleasant Songs”であると考えるのが自然であろう。『幼稚園』においては、“Introductory Songs”をこの2曲だけでなく、後の動きのための歌まで含めた全てを紹介していることになる。

以上は“ロンジェ”の音楽関係のごく一部分の紹介であったが、次にもうひとつの原書である“ドゥアイ”の『キンダー・ガルテン』を概観してみたい。

この書はフレーベルシステムの紹介が中心であるが、全136頁中、19～60頁は幼児歌唱曲の楽譜、歌詞、遊び方、指導法、指導内容、指導ポイントが記述されている。構成は次のようになっている。(A, Bは原書中の表記)

A. —Kindergarten Games. (幼稚園の遊び, 筆者訳)

以下に1～20番までの20曲分の楽譜と説明文が各曲毎に続く。

次に小見出し“Gymnastic Exercises”が付く。

以下に21～24番までの4曲分の楽譜と説明文が続く。

B. —Mental Exercises. (知性の練習, 筆者訳)

以下に1～23番までの23曲分の楽譜と説明文が続くが、次章へと続く前に約1頁文の注意書(note)が書かれている。その冒頭部分には意識すると、次の様に書かれている——もし、以上の曲を使って「動き」の意味を表す歌詞を歌いながら身体運動(bodily movements)がなされれば、子ども達は大いに楽しむことでしょう。

“デュアイ”の概略は以上であるが、一つ付け加えたいことがある。

B. —Mental Exercises. の第7曲目“Snow-balling”は日本では『蝶々』として親しまれている旋律(途中と最後の同型フレーズの終止音の1音を除けば同じ旋律)である(楽譜は、ヘ長調、 $\frac{2}{4}$ 拍子、16小節、リピート付き)。『幼稚園唱歌集』の第2曲目『蝶々』はト長調、 $\frac{4}{8}$ 拍子、16小節、リピート無し)。『蝶々』については論文の後半(次回に発表予定)で触れることになるので、念頭に置いておきたい。

さて「唱歌」に相当する語を原書から探すと、“Song” “Music”があり、唱歌を伴う「遊戯」(倉橋惣三は「唱歌遊戯」という語を使っている)は“Exercise” “Musical Gymnastic Exercises” “Kindergarten Games”等の語が該当すると言えるであろう。ここで確認のために再度『幼稚園』を調べてわかったことは、「唱歌」の語の使用は1回くらいで、「歌」に対しては「西洋ノ諸歌」「此遊」「歌」「音楽」という表現で書かれており、「歌う」という行為に対しては、「唄ふ」「謠ふ」「吟する」が使われ、「遊戯」に関しても、子どもが純粹に遊ぶ意味で1回程登場するが、「唱歌を伴う遊戯」の意味では「遊戯」と言わず「遊」「體操」「運動」の語で訳されていることがわかった。「唱歌」とか「遊戯」という語は、幼稚園で保育の一科として実施されたり、後に小、中学校で実際に実施される迄は、世の中で市民権を得ていなかった、という推測が成り立つが、これについては多くの文献を調べる必要があるだろう。

本項の最後に当たり、日本における唱歌を伴う「遊戯」についての受けとめ方、とらえ方について述べ、今後の研究の糸口としたい。

ここでは倉橋が当時の記録——「唱歌と遊戯とは後世は材料も豊富になって、別途の発達をして居るが、當初に於ては相併行する程のものでなく、唱歌の音調につれて軽い動作をす

る程度であるから唱歌の中に是を含むものとす」——を引用して「動作に表し易い歌詞の場合に、その表現をしたといふに過ぎない」⁽²³⁾と解釈していることに注目したい。

保育内容としての、唱歌を伴う「遊戯」に関する思想は、これまで述べた様に外国特にアメリカからの輸入であり、「翻訳書」の形で取り入れざるを得なかったという事実がある。これも又述べたように、原書中に書かれている五線楽譜は全て省略されており（当時の洋書や和書については、この件に関してこれから調べる予定であるので、『幼稚園』についてのみ言えることであるが）、動作や遊び方や解説の文章のみが日本人に入ってきたのである。そこにおいては解釈上の僅かなズレや無理解が生ずるだけでなく、当然のこととして、当時の日本の唱歌や遊戯についての、これまでの伝統的な考え方やとらえ方が（外国の思想の中に）織り込まれてゆくと見るのが自然であろう。又、そのようにして形成された考え方が、日本人の「唱歌」や「遊戯」の思想となる筈である。

昭和初期に著された倉橋の前掲書に見られる「(唱歌) 遊戯」に対する受けとめ方、考え方は外国書のそれに比べると、意図、計画、教育ビジョンの点から見てかなり消極的（或いは唱歌従属志向的とも言おうか）で、その思想は恐らく「おゆうぎ」として最近まで引継がれてきたものに反影されていると予想できる。

「(唱歌) 遊戯」から「おゆうぎ」へと引き継がれていった内容等の変容を調べること、及び日本と外国（少くとも輸出元のアメリカ）の“Musical Gymnastic Exercises”のその後の変容を調査比較することは、それぞれの国の音楽観や幼児教育観、子ども観の相違を見ることにつながり、興味深いテーマとなることであろう。本項では考えを深めるまでに至らなかったが、この問題に関する詳しい研究の意義を提起し、今後の筆者の研究につなげたいと思う。

I-3 〈「保育唱歌」の成立について〉

幼児教育に対して熱意と理解を持っていた東京女子師範学校摂理、中村正直は「附属幼稚園」の唱歌教材作成のために（直接の目的としては開園約1年後の明治10年11月27日の皇后、皇太后の行啓に際し園児が歌う曲を作る為）宮内省式部寮⁽²⁴⁾へ作曲の依頼を行った。これに関する記録は重要資料『保育並遊戯唱歌の撰譜』⁽²⁵⁾の中に見出すことができるが本項はこの資料を中心に考察を進める。

まず明治十年十一月十四日（以後全てアラビア数字に直す）式部頭坊城俊政より中村氏に宛てた添書案を含む坊城氏の記録内容の一部を挙げる^(資料2)。文中には宮内省雅楽課伶人が当時西洋音楽を学んでいたことも記載されているが、堀内敬三によれば、伶人が西洋音楽を学び始めたのは明治7年からとある。⁽²⁶⁾ 芝氏の資料中には西洋音楽を意識した記述が随所に見えるが、例えば次の文章からも読み取れる。——斯く古来の和琴譜の体裁によって新楽唱歌の伴奏を記したのは、和琴その物としても珍奇な新譜を作製しがたく、古い傳統に教育されて来た雅楽家のおい立によるもので、古式和琴譜と見ゆる内容に新楽唱歌への音律規範を盛り入れた事は、古式を尊ぶ楽家として重大な新時代への転回を示したものである。

以下続いて「保育唱歌」に関する内容を拾い、解説又は考察を加えてゆく。

9頁 「芝葛^{アザツネ}鎮筆假綴本、保育唱歌上唱歌之部」

(序文)

明治10年11月ヲ起原トシテ漸次撰成スル此歌曲ハ東京女子師範学校幼稚園保育歌謡ノ譜ヲ同校撰理中村正直ヨリ式部寮ニ請ヒ寮ヨリ雅楽課ニ下附セラレ伶人ヲシテ墨譜ヲ撰定シ、寮頭ノ調査ヲ經由シテ之ヲ該当娼母ニ教授シ生徒ヲシテ謡ハシムル所ナリ」

明治10年11月から唱歌の作曲を開始し、まず附属幼稚園の娼母に教授したことがわかる。

9～10頁 「歌ハ該校ニ於テ西洋原歌ノ意味ヲ譯シ、或ハ日本ノ古歌ヲ撰拔シテ之ヲ用フ唱歌ノ歌ハ笏拍子ヲ節（ヲ）拍チ琴ニ声ヲ應和シテ謡フ

遊戯ノ歌ハ笏拍子ヲ拍チ節ヲ左右ノ歩ニ踏ミテ謡フ（略）「保育唱歌」とか「遊戯唱歌」とか云ふ幼童用の唱歌であるとはいへ、「上申」を経た官撰の唱歌であったのである。」

外国の幼稚園関係書中の歌詞を訳したり、日本の古歌を選んだりして曲を付けたことが推察できる。笏を打ちながら琴に合せて歌ったこと、「遊戯」は足ぶみ（行進もしたと筆者は推察するが、したとしても「節ヲ左右ノ歩ニ踏ミテ」なのでかなりゆったりした歩調だったのであろう）をしながら歌ったことがわかる。又官撰の唱歌を担った誇らしさと価値についても表している。

16頁 「保育唱歌撰譜（作曲）の事は明治10年11月13日上申の遊戯唱歌「風車」と唱歌「冬燕居」の二曲を最初として凡そ明治15年末に至る丸5ヶ年間の労作であったと推考されるのである。」

保育唱歌の一曲目の完成が明治10年11月13日で明治15年末まで作曲活動が行なわれたと書かれている。芝氏はその根拠を、東京府学務課から唱歌依頼の撰譜は明治13年6月付けをもって終了しているが、芝祐夏筆の「保育唱歌箏、和琴之譜」に「明治16年3月写」とある点に置いている。

ところで、本資料中に附属幼稚園の娼母である近藤濱が雅楽課の作曲活動等実際に携わった内容が1ヶ所ある——「一方洋吹奏楽の稽古にも精勤しつゝ、日日と吸収する欧風の楽想を練成して、保育唱歌撰譜にも努力したのは左の廿四名の伶人と実際に幼童保育の事に従っていた幼稚園娼母一名である。

「一等伶人 東儀季^{すへなが}瀬 二曲 (明治11年の年令) 47歳」

以下五等伶人までの名簿が並び、最後に次のように列記されている。

「幼稚園娼母 近藤濱 四曲」

年令は彼女だけ無記名である。本論を書くに当たり筆者が調べた多くの文献には、中心人物の筆頭に挙がる娼母の名は「豊田美雄」で、保育唱歌集にも豊田の名は、訳詞者、作曲者としてよく現れるが、近藤の名は殆んど見当たらず、さほど重要な働きをしなかったと、筆者などは勝手な解釈をしていたが、少なくとも音楽面では近藤の働きぶりは大きかったこと

がうかがえる。

上記文面からわかることであるが、伶人達が唱歌を作曲するに当たっては、雅楽の旋律そのものでなく、洋楽を受け入れて作曲しようとした意気込みも伝わり、改めて「保育唱歌は雅楽課伶人が雅楽調に作曲したもの」と一般に言われることが確認できると思う。

43頁 「本来は保育唱歌には和琴を掻き添へるのみのものであったが、この公演には笙、箏、篳篥、箏の三管附物を用ひ琵琶、箏、両絃の譜も作って古式催馬楽風の演奏としたものである。」

これは明治15年11月18, 19日、秋季舞楽大演習についての芝氏の評であるが、当時の演奏会には神楽、舞楽等と並んで保育唱歌、欧洲楽、欧洲管絃楽も演奏されたことがここでも明らかである。保育唱歌は和琴と一緒に歌うこともわかる。

唱歌作曲全盛の明治13年には、伶官全員の日課に「新楽唱歌の教習」を加えてほしいという願いが式部頭から宮内卿宛に出されるほど、保育唱歌は大きな位置を占めていたことも資料40頁からわかる。そして13年5月より教科細目に加えられたことが59頁に記されている。

保育唱歌中の1曲「君が代」については59頁に次の様に記されている——「新楽唱歌（保育唱歌）として奥好義の手に成り、当時の上席伶人長林廣守の英断によって英国人楽隊長フェントン作の「君ケ代」を廃して之に替へ世に顕はされたものである」

保育唱歌が実際に何曲あるかについては明確ではない。それは曲の数え方や分類のしかたにより異なるからである。筆者が所見した2冊の保育唱歌⁽²⁷⁾の1方は「清水たづ」署名のもので曲名、作曲者名、拍子、調子、文字譜、歌詞が墨書され、約83曲ある。他方は、各曲目と歌詞のみで、作曲者名や文字譜は無く、作詞者に該当する部分に「豊田英雄詠」とか「古今集」とあるもの、或いは曲名以外何も書かれていない等である。約79曲を含む。しかるに「保育唱歌」の曲数は、芝氏の前掲資料15頁の内容をもって全部で約111曲としたい。

——「斯く80曲に18曲を加へれば98曲と云う事になるが、一曲にて二段或いは八段を備へるものもあり「四季の歌」の如く春夏秋冬に分かれたものもあり、或はまた「明石ノ浦」の如く「春日山」の旋律を用いて唱うものなども11曲あるので、差引撰譜の総計としては凡そ111曲である。」

何故、これだけ多数の官撰唱歌が出版されなかったのか。この疑問に答えてくれる文面を同資料から次に紹介したい。

45頁 「雅楽課撰譜の新楽唱歌（保育並遊戯唱歌）譜の出版頒布の事か建議された。之は後に掲げた文部省の音楽取調掛へ兼勤された諸氏からの発議と考へられ、一般教育音楽へ貢献せんと計られたものであるが、この議は実現せず、既に明治14年11月に出版された文部省編纂の「小学唱歌集」が唱歌の教材となり大正時代まで学校唱歌に用いられ、東京音楽学校（今の芸術大学音楽学部）入学試験の課題曲もこの唱歌集から出題されたのである。（略）第二編（16年3月28日出版）第三編（17年3月29日出版）と順次発行されたが、その中に雅楽課撰譜（作曲）の新楽唱歌（保育並遊戯唱歌）六曲も編入される事となり次の如く曲譜が送附されたのである。」

上記の6曲とは「花橘、鏡山、ふりぬるふみ、山時鳥、風車、野山の遊び」であるが、筆

者が調べた限りでは「風車」が「幼稚園唱歌集」に載っているだけである。この曲は保育唱歌では「遊戯風車」であり、遊びながらうたう歌として作られたものであるが、「幼稚園唱歌集」では16番目の歌曲として載っている。

保育唱歌は公式の出版という形の実現を見ることはなかったが、ともかく文部省が「小学唱歌集」「幼稚園唱歌集」とも世に送り出したという事実は、幼児音楽教育に対する配慮の重さを感じさせる。そして「小学唱歌集」と「幼稚園唱歌集」の互いの音楽の類似性（この件に関する分析はまだ行っていないが）から考えると、当時の関係者の考え方の中に、日本の音階ではなく、西洋の音階に基く音楽を広く浸透させていこうという意志と方向性が強く在ったことが感じられる。この点を裏づける文を文献⁽²⁸⁾からいくつか抜粋して示す（資料3）

以上、資料の検証を行ったが、山住正己、藤田芙美子両氏の研究を参考にしながら、「保育唱歌」についてまとめてみたい。

まず、保育唱歌の成り立ちを大きく分ける。

- ① 日本の詩歌から選出したもの（万葉集、明倫集、古今集、拾遺集等）……………約50%
- ② 保母による外国の幼稚園書の訳や改作……………約25%
- ③ 保母の作詞及び不明のもの……………約25%

保育唱歌は儒教精神を尊び、花鳥風月を歌った歌詞が多く、全体に穏やかで時には歌う者を落ち着いた気分へ導いたのではないかと思う（これは唱歌の目的が『幼稚園唱歌集』の緒言が示す如く「幼徳ヲ涵養す」ることにあるため当然ともいえるが）。西洋音階に親しんでいる現代人と違い、当時の子どもや保母にとっては雅楽調だからこそ（難解な歌詞は別として）親しめる曲もかなりあったのではなかろうか。又これだけ多くの曲をまんべんなく歌い教えるのは容易でなく、当然歌い易い曲、好まれる曲をくり返し取り上げたことは想像できる。芝氏の111曲を基に数えると、「遊戯」曲は11曲程ある。その代表曲を挙げると『風車、家鳩、民草、^{ウロクズ}遊魚、盲想ノ遊、窮鼠』等となろう。

一般に保育唱歌の「長く優美な旋律」は否定的な意味合いで評されることが多いが、大人より速いテンポ感、リズム感を有する幼児が西洋音階の軽快な曲へ傾く事は必至ともいえるが、明治期にあっても現代にあっても、5歳児ぐらいになったら、子ども自身の嗜好のみにとらわれない楽曲設定は時には必要であり、意義もあることと考える。

ともかく、保育唱歌がすたれた最大の理由は、①子ども達が「後から新たにやってきた唱歌」により共感した、②文部省が新しい歌唱曲作りを強力な目的意識をもって全国的に進めた、の2つにつきるといえよう。

筆者の過去10余年の保育園における音楽指導の実践経験から言えることは、幼児は教えられない曲、即ち聴いたことのない知らない曲に対する受容度はかなり低く、時には否定的でもある。逆に第一印象で気に入った場合は、ずっとその曲に固執するものである。これを換言すると、さほど好まない歌でも、何回も積極的に教え込まれると好意的に受け入れる傾向を持っている。この事は、程度の差こそあれ、幼児に限らず大人にもあてはまることといえる。そうであれば、このような傾向をもたらす力こそが音楽そのものであり、音楽の芸術性と言えるのかもしれない。

〔註〕

- (1)吉川英史「日本音楽の歴史」創元社1965年 171～172頁
- (2)音楽学者吉川氏は、音楽の方面では、フェノロサや岡倉天心らに相当する大物思想家が現れなかったことが、伝統音楽衰退につながったとしている。前掲「日本音楽の歴史」359頁
- (3)遠藤宏「明治音楽史考」有朋堂1948年 358頁
- (4)「幼稚園教育百年史」文部省1979年 資料編500頁の「1 学制(抄)」参照
- (5)新庄よしこ「創設期の幼稚園教育」「幼稚園90年のあゆみ」文部省1996年より13頁
- (6)明治45年(大正元年)11月1日開園の奈良女子高等師範学校附属幼稚園が加わるにより、官立幼稚園は2園となる。
- (7)前掲(4)より「文部省年報：明治十年「附属幼稚園規則」より「保育科目」参照
- (8)当時の役人松野礪氏夫人。ドイツ人でフレーベル流の保育を学び、附属幼稚園では主として保母の指導に当たったとされているが、後出の『日本幼稚園史』を読むと、ピアノによる園児の音楽指導に就いていたことが推測される。(前掲(4)第1章第2節参照)
- (9)水戸藩士で儒学者の藤田東湖は豊田の母の兄にあたる。夫豊田小太郎は刺客に倒される。東京女子師範学校摂理、中村正直の推薦により読書教員として、漢文、歴史、地理を受持った。(茨城県幼稚園長会発行の「豊田英雄先生の生涯」1957年、お茶の水女子大学附属図書館蔵、参照)
- (10)倉橋惣三・新庄よしこ「日本幼稚園史」臨川書店1930年初版 1983年復刻版第二刷。24頁。「市下市立幼稚園の始めは、明治十二年中に女子師範学校の保姆近藤はまが、芝公園内に近藤幼稚園を開きたるを始めとす」
- (11)堀内敬三「音楽五十年史」鱗書房1943年、8頁
- (12)山住正己「洋楽事始」東洋文庫188, 平凡社。1976年初版第3刷「解説」335頁によると「ヨーロッパの音楽史をたどると、日本にキリシタン音楽がもちこまれたのは、まだバロック音楽の初期のころであり、バッハの登場もまだ先のことであった。東西の交流がつづけば、布教の範囲をこえて、洋楽もとりいれられるようになっただろうことはたしか」とあり興味深い。
- (13)山住正己「唱歌教育成立過程の研究」東大出版会 1977年 17頁に次の様に記されている。「ただし、教訓歌であっても(教訓歌を手まり唄の旋律で歌った明治14年頃の教師の例を指している。〔()内は筆者〕)これはとにかく子どもの集団的な遊びとむすびついていたのだから、のちの学校唱歌より子どもたちに歓迎されたとしても不思議ではない。問題は、こういう遊びとともに歌いつがれてきたわらべ唄が、学校教育ではまったくとりあげられなかったところにある。」
- (14)前掲 (13)16頁
- (15)前掲 (4)「資料編」775頁「緊要ノ校務ニ関スル意見」の項「唱歌ハ緊要ノ一教科ニシテ女子ノ教育ト幼稚園幼稚ノ保育ニ至テハ殊ニ諸教科中ノ貴重ナルモノナリ(略)」
- (16)前掲書(9)「豊田英雄先生の生涯」10頁
- (17)『小学唱歌集 初編, 小学校師範学校中学校教科用書』文部省音楽取調掛編纂, 明治14年11月, 国立音楽大学附属図書館所蔵を所見。資料1も参照されたい。
- (18)『幼稚園唱歌集 全』文部省音楽取調掛編纂 明治20年12月, お茶の水女子大学附属図書館所蔵を所見。資料1も参照されたい。
- (19)藤田美美子「保育唱歌研究」『創立五十周年記念論文集』国立音楽大学, 1978年 356頁
- (20)今回主として湯川嘉津美氏の論文から多くを学ぶことができた。『明治初期におけるフレーベル主義教育の受容—米国幼稚園関係書の影響を中心に—』幼児教育研究12月号 344頁～364頁, 1987年 日本教育大学協会, 幼児教育部門会編
- (21)A. Douai: The Kindergarten. 第4版, N. Y., Steigen, 1872, 国立国会図書館所蔵。
- (22)Ronge, Johann and Berthe: A Practical Guide to the English Kindergarten, A, N, Myers & Co., 第10版 1877年 国立国会図書館所蔵
- (23)前掲書(10), 『日本幼稚園史』234頁
- (24)大宝元年, 大宝令が制定され, 規定により宮廷の楽舞の教育を主とする国立の役所が置かれた。平安後期にはその教習の仕事は楽所に移り有名無実な役所となる。江戸幕府は衰微した朝廷の儀式を復活させ, 雅楽は復興したが幕府や大名の式楽は雅楽でなく能楽となる。明治3年太政官の中に雅楽局が置かれ, 楽人は伶人と改まり翌年雅楽課となる。明治21年には雅楽部, 明治40年には楽部と改称。(吉川英史の前掲書(1)参照)。現在の正式名称は「宮内庁式部職楽部」。
- (25)この資料は昭和30年12月26日付で芝祐泰が編んだ未刊の手稿本で, 筆者は国立音楽大学附属図書館所

蔵のものを所見した。その結果わかったが、これは芝氏が唱歌に関する当時の資料を筆写し且つ自らの感想をも添書して完成させたものである。

(26)堀内敬三「音楽明治百年史」音楽之友社1968年、26頁——この人たちの本職はもちろん雅楽の演奏であったけれど、明治の勢いは宮中にも洋楽を用いる必要を感じさせている。その用途は主として外国使臣らを饗応する場合の奏楽であるが、そうした直接の用途以外にも西洋の音楽を研究しようという気持ちは若い伶人たちの間に燃えていた。明治7年12月から雅楽課では海軍軍楽長中村祐庸を聘して欧州楽（吹奏楽）をせしめ——。

(27)1つは「清水たづ」と筆書された和綴写本で「保育唱歌」と表紙に墨で書かれたもの。明治十六年という日付もあり全部で約83曲。

1つは、編著名、月日共不明の和綴写本、表紙には墨で「幼稚園唱歌」と書かれ約79曲。両写本共、お茶の水女子大学附属図書館所蔵。

(28)伊澤修二君還暦祝賀会編「楽石自伝教界周遊前記、国書刊行会 1912年原本発行 1980年発行、明治教育古典叢書1-13、国立音楽大学附属図書館所蔵。

資料1

〈創置処務概略〉より

① 右の如く東西二洋の音楽を折衷し、将来我国楽を興すの一助たるべきものを造成するを以て、現今の要務となすときは、実際取調すべき事項、大綱三あるべし。曰く、東西二洋の音楽折衷に着手する事。曰く、将来国楽を興すべき人物を養成すること。曰く、諸学校に音楽を実施して適否を試る事。(5頁)

② 第一項 東西二洋の音楽を折衷して、新曲を作る事。(略) 右の理由なるを以て、着手の始に当りては、童謡其他、最も簡短なる謡類を集め、西洋の童謡に比較し、二者折衷して相当の歌曲を作り、将来、小学生徒に授くるの資とすべし。(5～6頁)

③ 第三項 諸学校に音楽を実施する事。第一項の手段によりて、新作の歌曲を得るときは、之を東京師範学校付属小学、及び東京女子師範学校付属幼稚園、并に練習小学生徒等を実施して其適否を試み、其佳なる者を撰んで掛図及び謡本を製し、漸々他の諸学校に普及する途を求むべし。(7頁)

④ 明治十四年十月、音楽取調御用掛伊沢修二、音楽取調掛長に任ず。明治十五年一月、音楽取調事務大要を制定し、之を上呈すること、左の如し。

第一 諸種の楽曲取調の事

諸種の楽曲中特に取調を要するものは、本邦の部に在て雅楽・俗楽とし、外国の部に在て西洋楽・清楽とす。俗楽に於ては、箏曲、長唄等を始め、其他各種に及び、西洋楽に於ては、古楽、今代楽等、皆其取調を要するものとす。(20頁)

⑤ 第二 学校唱歌の事

学校唱歌に就き要する所の事項は、楽譜及び歌詞の撰定、図書の編輯、楽器の練習及び唱歌普及の方法とす。楽譜は、本邦人若くは西洋人の作を撰用し、歌詞は既有の楽譜に従て作為するものと、楽譜の撰定に先だちて作為するものと二種とす。(略) 既有の楽譜に従て歌詞を作るときは、先ず其楽譜を解剖して、其施法口調等を考査し(略) 楽譜の撰定に先だちて歌作を為すときは、其句数字数等を定め、他日楽譜を作るに当り、極めて唱歌に適切なら

んことを要すべし。(略) 学校唱歌に用いる所の楽器は本邦の箏・胡弓・西洋のヴァイオリン・風琴・洋琴と定むべし。下等若くは中等小学の唱歌には、箏・胡弓等を以て足れりとすべし。若しヴァイオリンは風琴あれば最も善しとす。(22頁)

⑥ 第五 俗曲改良の事

俗曲は我民樂なり。故に此曲の正否は、世教に影響を及ぼすこと少なからざれば、宜く改良の途を求むべし。其法蓋し二あり。即ち其曲を全存して其歌詞のみを改むべきもの、及び其曲の一分を存して之が歌詞を作るべきもの、是なり。(26頁)

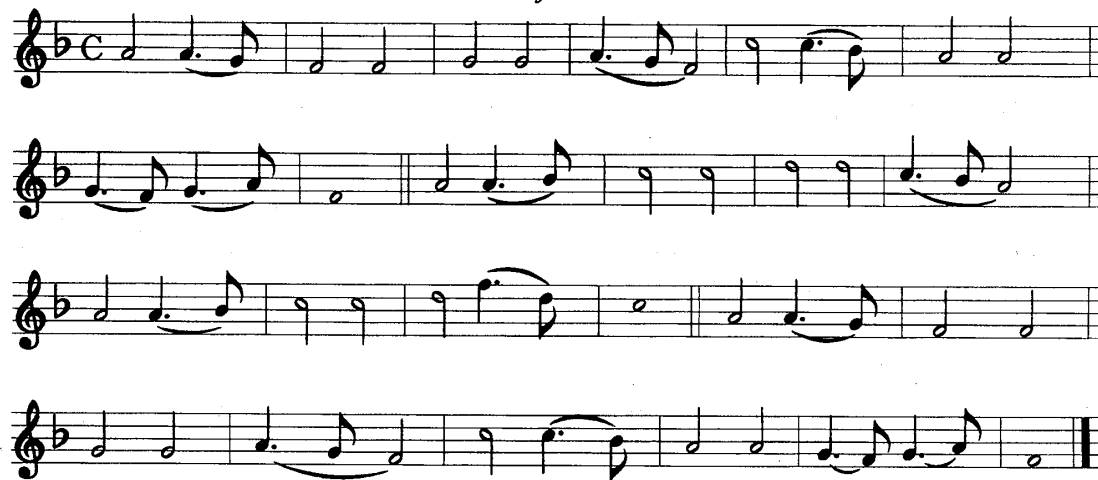
⑦ 第六 音楽伝習の事

当掛に於て伝習人に授くべきものは、唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管絃楽器とす。唱歌を伝習するは、最初簡單なる単音歌曲に起り、漸次高等の唱歌に及ぶものとす。洋琴の練習は、将来彼我雅俗、何れの音楽を学ぶにも必要にして、実に音楽の基礎とも称すべきものなれば、当掛伝習人必習の科目と定むべし。(27頁)

〈唱歌集及び掛図編成出版の事〉より

⑧ 唱歌集は、唱歌掛図中のものを取て之を冊子に印行し、各自生徒の便に供するものなり。即ち其初編は、唱歌掛図初編及び其続編中のものを以て成る。其刊行落成は、明治十五年四月に在り。(略) 是より後更に高等の歌曲を撰定し、之を集めて唱歌集第三編と為す。(略) 別にまた、従来撰定するところの幼稚園用の唱歌を集め、之を『幼稚園唱歌集』と成す。(160頁)

楽譜① *The Pleasant Sight.* (英語歌詞省略)



楽譜②

見わたせば (歌詞省略)



資料 2

保育唱歌撰譜の依頼

「明治新政と共に旧習を改め新制を立て、雅楽道の継承保存に全力を挙げて居った式部寮の雅楽課は、単に傳統保全のみに終らず新時代に即応すべく歐洲樂傳習の議が決し、雅楽家の伶人は日一日の長を為して居った海軍省軍樂隊に就いてその稽古を受け、流石に千年来音律の中に育って来た樂家の真髓を發揮して頗る短時日の間に洋樂器驅使の実を挙げ、明治九年十一月三日の明治天皇天長節に、古例の舞樂に代へて欧州吹奏樂を公式宴会に奏し得たのであった(略)東京女子師範学校(明治八年創立)——誤りをそのまま記載する(筆者)——摂理中村正直より式部寮へ当てて、同校の幼童に授ける遊戲と唱歌の作曲依頼があった。(略)」

資料 3

〈樂石自傳教界周遊前記〉より抜粋

- ① (72頁)「かくてメーソン氏も来り傳習生も出来たけれ共其他には何も無い、樂器が一臺あるで無く、唱歌掛圖が一綴あるでも無く、唱歌といふ言葉すら確定してをったのでは無い、といふ有様であった(略)ソレ(オルガンのこと〈筆者補〉)が漸く着したからしてやうやう教授を開始したけれ共、唱歌に関する言葉が無いからしてメーソン氏の話を通譯することも出来なかった」
- ② (74頁)「言葉も大概は出来、且つ取調べた曲も漸く増加したからして、今度はこれに日本國語の唱歌を附することとしたが(略)そこで歌も作る曲意も解る、句数字数も自在に変化し得るといふ作歌者を得る必要が起った、而して最初に尽力してくれた人は稲垣千穎氏で(略)」
- ③ (75頁)「右稲垣、加部、里美三氏の作歌を主とし、唱歌が数十篇出来上ったからして、愈々唱歌集を編纂することとなった(略)漫然として掻き蒐められたのではない(略)而して来朝後氏(メーソンのこと〈筆者補〉)に我國の雅樂及俗樂をも聴かせた所が、氏は感じて、日本の曲は不思議な程スコットランドの曲に似てをる、古英吉利の曲に似てをると云った(略)」

- ④ (76頁)「音楽取調掛では、尚ほ我国人の手で出来た曲を必要とするといふ意見であつた、然るに此頃日本人中、音楽の解る人は何所に在るかといへば、雅楽局の伶人諸氏のみである(略)芝葛鎮氏、上真行氏、奥好義氏(略)」
- ⑤ (77頁)「小学唱歌集中の『大和撫子』『五常の歌』『鏡なす』などの曲は、我国音楽家たる前記諸氏の手に成つたものである。」
- ⑥ (78頁)「所感如何と尋ねると『誠に結構であります、ドウも眠くて困つた』と答へる、又中には萬歳の調子で、お経文を聴くが如しなどと冷評して(略)此様子では、西洋風の音楽といふ者は到底これを我國に入れることが出来ぬかと、一時は殆んど絶望に陥る程で(略)」
- ⑦ (79頁)「明治十五年一月に至り、音楽取調掛の事務大要を改めて第一には本邦の雅楽俗曲を調査すること(略)第六には、学校の唱歌をして一層の発達を遂げしめる為め、楽譜及歌詞を選定し、圖書を出版し且つ楽器の普及を圖ること(略)」
- ⑧ (71~72頁)「従来の日本人には美術的教育が缺けてをった(略)我々は何等美術的の素養が無い為めに、文明人に卑められることが有つた(略)悪罵には耳を傾ける必要がないとしても(略)殊に音楽教育が最も重要であつて(略)これを以て余は在米中にも文部省に向つて音楽教育の必要を建議し(略)余が寺島文部卿に呈出した意見書に依り、明治十二年十月文部省内に音楽取調掛が(〈筆者補〉)設立せられ、同時に余は其御用掛となつた」

あきやま はるこ (音楽美学)